

〈資料〉

中曽根康弘首相・全斗煥大統領会談録

——1983年1月——

服部 龍二

中曽根康弘内閣が成立したのは、1982年11月27日のことだった。中曽根内閣は「戦後政治の総決算」を掲げ、国鉄、日本専売公社、日本電信電話公社の民営化を進めた。三公社の民営化とともに、中曽根が内政面で意図したのは教育改革であった。教育改革は中途半端に終わっており、中曽根は教育改革と憲法改正に最も未練を残した。教育基本法が改正されたのは、2006年になってからである。

中曽根は外交面で大きな成果を上げた。その外交は、アメリカ大統領レーガンとのロン・ヤス関係や先進国首脳会議に象徴されるものの、最初の訪問先は韓国であった。中曽根は1983年1月11、12日にソウルで全斗煥大統領と会談した。日本の首相として、初の韓国公式訪問である。

以下では、外務省アジア局北東アジア課「中曽根総理大臣韓国訪問（会談記録）」（1983年1月）から首脳会談記録を紹介したい。情報公開法による外務省開示文書であり、開示請求番号は2013-544となっている。「中曽根総理大臣韓国訪問（会談記録）」には、外相会談、蔵相会談、経済協力問題実務者協議も含まれるが、ここでは省略した。形式面での不統一は、そのままに残してある。

I 第1回首脳会談（テータテート）

日時：11日 午後5時20分—6時

出席者：（日本側）中曽根 総理大臣

前田 大使

通訳

（韓国側）全 大統領

通訳

1.（全大統領）本日は一般的な話しをすることとしたい。先ず中曽根総理のお話しをうかがいたい。

（中曽根総理）先ず今回の訪韓に際して大統領閣下より破格の御待遇を受けたことに対し感謝申し上げます。この栄誉は私個人に対して与えられたものでなく日本国民に与えられたものとして感謝する。日本と韓国は最も近い関係にあり、従つて両国の関係も最も親しい国でなければならない。今回、大統領閣下の御英断により経協問題が解決されたことを契機として、訪韓することになったが、この機会に両国間の友好関係をより一層深めて参りたい。また、新内閣を組織して以来、日本は自由世界の一員として国際社会に積極的に貢献しなければならないとの信念でやつてきた。我が国と最も近い韓国との関

係を改善するため、先ず貴国を訪問し懸案を解決したいと決心したが、それが実現できてうれしい。17日には、日米関係改善のため米国を訪問しレーガン大統領と会うが、できれば5月の連休にはASEANを訪問したいと考えている。これは、アジアの自由世界の一員として米国とともに結束したいためである。全斗煥大統領閣下は大統領に就任されてすぐレーガン大統領と会談されたが、その外交手腕に感服した。自分は今大統領の真似をしている。全大統領は新時代という言葉をよく使われるが、今回の私の訪韓を契機に日韓関係の次元を一步前進させたい。またこの次は全大統領御夫妻に日本に来て下さるよう招待申し上げたい。

2. (全大統領) 大変ありがたい。これは自分だけでなく韓国の知識人一般にいえることであるが、韓国と日本は最も近い隣人でありながら、今までは何か実質的に親密な関係でなかつた。この点善処する必要があると考えている。日本の総理大臣閣下として、政治家として、一国の指導者としてまた戦略家としての中曽根総理の英断に敬意を表しかつ高く評価している。韓国は独立して37年になるが、首都ソウルで日章旗と大極旗が仲良く並んで翻つているのを見るのは今回がはじめてである。これは中曽根総理閣下の英断なくしてはできなかつたことであり、祝福すべきことである。韓国国民の日本に対する感情がいかに鋭敏であるか、大統領に就任してよく分つた。被害者はいつまでも被害を受けたことを忘れないが、加害者は害を加えたことをすぐ忘れてしまう。中曽根総理の今回の訪問を契機としてこのような面を緩和していく必要があると考える。今後は心を寛容にして、互いに兄と弟とも言えるような関係としていきたい。日本に対する経済協力要請は次の二つに理由から行つているものである。第一は、韓国の軍備が北朝鮮との比較で2対1の劣勢にあるということであるが、この劣勢を挽回するためには151億ドルの国防費が必要となる。今の韓国の経済力、財政力ではこの劣勢を挽回するには10年以上を要する。国際情勢に関しては総理は大先輩であられるが、自分は80年代は何らかの危機をはらんでいるとの認識に立つており、80年代の半ばまでには軍備面で北朝鮮の70%までにもつていく必要があるということである。第二に、日韓両国が真の善隣友好関係を維持していくためには、日本政府が韓国に対して真の配慮を示すこと、本当に日本は誠意をつくしてやつてくれたという特別のできごとが必要だつたということである。このことは65年の国交正常化当時一度確認したことであるが、当時はそれに反対する爆発的な感情が示された。これが朴政権の命取りともなつた位である。中曽根総理の韓国訪問というこの機会に、日本の指導者が韓国に対し包容力を示す政治決断をして欲しい。

3. (中曽根総理) 全大統領閣下の謙虚なお話しに恐縮している。我々は過去を反省し、韓国国民に対してはあくまでも謙虚で誠実でなければならないと考えている。

(全大統領) 将来とも両国間には様々な問題が生じるであろうが、長期的視野に立ち、虚心坦懐に共存共栄の精神で解決していくことは、我々の子孫への大きな務めである。

4. (中曽根総理) これで大統領とは親友になつたつもりであるが、これからは時々電話をし、電話を通じて二人で決めていくこととしたく、連休があればお互いに訪問できるような間柄にしたい。大統領のお考え如何。

(全大統領) 電話の件は結構である。全く同感。

5. (中曽根総理) 大統領閣下は北鮮をひかえて大変であるが、北鮮に対してイニシアティブをとられて

おられることは有効な戦略と思う。また1988年のオリンピック招致は大きな貢献であり、ソウル開催の成功を祈念しており、協力要請があれば必要な協力を惜しまない。

（全大統領）電話もし、訪問もしたい。心と心が通じ合う国家間の関係こそ、自由世界の団結と地域の平和、安全、生存に最も資するものである。

（中曽根総理）同じく同感。

II. 第2回首脳会談（テータテト会談）

日 時：1月12日 午前10時30分～11時45分

出席者：（日本側）中曽根総理

通 訳

（韓国側）全大統領

通 訳

1. （中曽根総理）日本と韓国は共に自由世界の一員である。また、韓国が民生の安定、国土の建設、国防力の充実に努力することはアジアの平和と安定の要ともなることであり、韓国がはらっている努力を高く評価する。日本の立場は、韓国と強い友好的な靱帯を持ち、米国とは日米安保条約を通じて靱帯を持ち、ASEANとの靱帯を持つということである。北朝鮮と我が国は外交関係もなく、また、朝鮮動乱の経緯をみても何れが先に攻撃を仕掛けたかは明らかであり、北を牽制するために韓国がはらっている懸命の努力に敬意を表す。

朝鮮半島の南北問題は貴国の内政事項であり、我が国としては貴国と外交関係を持つていることを心に銘じている。民間の関係、貿易等の事実上の行為は行つていくが、これはあくまでも事実上の行為である。

昨日も申し上げたが、オリンピックのソウルへの招請や南北首脳会談の提唱等、全大統領の積極外交を高く評価している。

アジアの問題については協議していきたいと考えている。中国との問題については、先般ミグが来たが、もし我々でお役に立てることがあればお役に立ちたい。

自分（総理）は昔、周恩来に対して南北同時国連加盟に対してどう考えるかと質したことがある。彼（周）は内心賛成していたようであるが、北が賛成しないであろうとだけ言つたことを記憶している。

17日に米国を訪問し、レーガン大統領と会うが、もし全大統領よりメッセージがあれば、お伝え致したい。

2. （全大統領）只今の総理のお話しに全く同感であり敬意を表したい。

自由世界の東北の地域に経済大国たる日本が存在することは良いことであると確信している。80年代の情勢をみるに、日毎に不安定性、不確実性が増してきており憂慮に耐えない。韓国と米国は相互防衛条約、日本と米国は日米安保条約により、両国ともに米国の保護を受けているのが実情であるが、問題はその基礎となるソ連に対しての軍事アンバランスである。ソ連は極東地域に51個師団、戦艦

800隻、このうち潜水艦150隻（うち31隻は核潜水艦）、航空勢力は2,200機をウラジオストック等の至近距離に配置している。バックファイヤーだけでも相当数ありSS-20は800もある。他方、第7艦隊は50隻余り、日本は150隻（うち潜水艦15）を有しているが、北だけでも20隻の潜水艦を持つている。北の潜水艦は性能において劣るであろうが、以上のように自由世界が劣勢にあることは否定できない。航空勢力においても米韓日で1,000を上回る程度であり、これも共産側に対して数的に劣っている。このように今後、この地域の安全に対する日本の寄与度は上昇せざるを得ない。然るべき貢献を期待している。自分（全大統領）からリマインドする必要はないが、中国とソ連はそれぞれ北と軍事同盟を結んでいることは厳然たる事実であり、米国との安保体制はあるが、この地域については日本が中心となつて大陸に対するパワーバランスを作る必要がある。実質的に同盟関係までもつていくべきであるとの所信をもっている。先程、経済大国日本が存在することは大変良いことだと言つたが、ソ連と中国は歴史的に南下政策をとつており、現在もお南下政策を続けている。これを牽制する勢力は日本を除いてはない。ソ連に対する牽制の役割を日本に期待したい。日本を中心として韓国、アジア諸国が団結して米国が息切れしたときはこれを補う必要がある。

九州特に北九州地域は日本の心臓ともいえる工業の中心と聞いている。日本と韓国との間の距離は普通2時間といわれているが、韓国の南から九州まではわずか110マイルしかない。もし韓国がソ連の軍事的影響圏内に入れば、日本に対する脅威は想像以上のものとなる。日本の自由が大変難しくなる。

また先程総理から御丁寧にレーガン大統領に対するメッセージはないかとのお話しがあつたが、メッセージはない。ただ経済問題は自分（全大統領）の関心事である。今日の国際経済環境は1930年代を髣髴とさせるものがある。時代こそ違つているが、自国産業保護の名分の下に自由貿易の原則を破り保護貿易に走つているのは大変危険である。第二次大戦の原因にもなつたが、経済的に利益のない保護貿易により、政治的にも世界の軋轢を招くことは止めてもらいたい。少くとも役に立たないことは止めるべきである。日本と米国が相携えてウイリアムズバーグにおける会談において何等かの解決の途を見出すべきこと、行き詰つているところを何とかしてもらいたいと期待している。

第2次大戦後は米国をリーダーとして団結してきたが、今日、米国の影響力は相当落ちてきている。したがつて、少くとも理念を同じくする国は団結すべきである。第3諸国は植民地時代の経験から米国に対して、また日本に対しても疑惑をもっている。これは自由世界の結束を妨げる原因となつているが、政治家としてこの問題を軽く扱つてはならないと考えている。

ソ連と中国との再接近の問題、中ソの和解には大変大きな関心をもつてみている。国際政治の中には歴史的に利害関係が合わないためこの和解は成立たないという人がいるが、これは安易な見方である。ソ連と中国は理念と体制を同じくしている。両方とも共産独裁政権である。両方が共通した獲物と考えれば野合するであろう。中国は日本と接近した方が利益になると思つて接近したが、願わくば、中ソが和合しないよう日本に離間策をとつてもらいたい。くさびを打つてもらいたい。

統一問題については、南北の分断は韓国国民の願つてできたものではなく、あくまでもソ連・中国・米国の政策により分断されたものであることをはつきり申し上げて置きたい。日・米・ソ・中の4カ国が朝鮮半島の平和的再統一問題を話し合う国際環境を作る必要があるが、このために日本のトップリー

ダーに中国と話し合いを行つて頂くことはかかる国際環境を作り上げる基礎となると考えている。ソ連とは北方領土の問題があり負担となると考えられるので、ソ連と話し合つて頂きたいとは言わない。中国に対して中曽根総理がこの問題を真先きに取り上げて、それが実るとすれば、世界の歴史の1ページとなるであろうと確信する。

このたびは韓国と日本の間の数々の懸案を中曽根総理の英断により一括妥結にまでこぎつかれたことに対し御礼を申し上げる。口先だけでなく心と心が通じ合う隣の友人になりたい。日本と協力して自由世界の望ましい秩序を作りたい。強大国は警戒心をもたれるが韓国は強大国ではなく疑惑をもたれることもないので、日本を中心として団結したいということを各国に話していくことを自分（全大統領）の役割としたい。

太平洋サミットを提唱したことがあるが、総理は昔から大変な関心を持つていることを知り、大変すまなく思っている。太平洋沿岸国の相互協調は歴史の必然である。風俗、民族、国の体制が異なると言われていたが、文化交流、スポーツ交流等非政治面での交流に重点を移せば相互の発展に大きな助けとなる。但し、こういう提案を日本のような大国が行うと疑念を生じさせることとなるので韓国が発表した。これを推進していくためには日本の協力が必要である。2-3年後には太平洋サミットができることを希望している。

（全大統領）別室で安倍、竹下大臣以下がお待ちかねのようであるので、まことに申訳ないが、最後にもう一言申し上げたく、これが心理的に貴総理に負担として受けとられないよう、しかし肯定的に考えていただければ有難い。

日本のような大国が韓国の如き弱小国をやつつけようと思えばいつでもそれはやれることである一方、これを育ててやろうと思うならばそれもまた可能なことであろう。韓国側としてはかねてからの日本の対韓協力が韓国の発展に絶大なる寄与をしてきたことを高く評価しているところであるが、基本的には双方の間の心と心の通い合いが大切である。自分が今希望しているのは、御承知のとおり、大変遅れている韓国中小企業の技術レベルにかんがみ、その要員の訓練を日本で引受けていただけないかということである。これに応じていただけるならば、総理今回の御訪問の特別の贈物として韓国国民に受けとられるであろう。

3.（中曽根総理）ただ今まで大統領から種々の問題につき率直かつ詳細なお話を承ることができ、感謝する。時間の関係があるので、自分からは簡単に申上げることにした。

(1) 極東の安全、日本の防衛問題についてであるが、日本では敗戦、マッカーサーの占領の結果、軍事問題についてはアレルギーがもたれているところ、自分の基本的な考え方は、日米安保条約が今日の日本の発展の基本的なファクターであるというにあり、憲法の範囲内で安保条約をどのように運営して行くかに意を用いている。日米両国は安保条約を通じ相互補完関係にあり、日本の防衛力の増大は米国の機動力を増やし、日本にとつてのみならず、広くアジアの平和と安定に寄与することになると考えている。日本の左翼勢力、ジャーナリズムの一部には憲法の改正をあたかも悪いことであるかの如く思い、タブーとなつている。自分としてはかかる傾向を突きくずすことに努力している。日本は自由世界の一員として友好国と手をたずさえて行くことが肝要であり、これなくしてはここまで大き

くなつた日本の前途はないものと確信している。

(2) 中ソ関係については全く大統領のお説のとおりであり、日本の安全には中ソが対立していることが重要なファクターの1つである。然し共産圏の諸国はいつ変わるかわからず、日米、日韓が提携を緊密にして行くことが最も重要である。自分が13年前の防衛庁長官時代、北京放送、モスクワ放送は佐藤総理と自分とを指して日本軍国主義の頭目よばわりしていた。彼らは常に戦略的に物を考えている国なので、都合が良ければ利用し、悪くなれば捨てるという態度であると考え。

(3) 朝鮮半島の平和統一問題については、日、米、中、ソの4カ国関係が重要なファクターとなるものと思うが、大統領のお考えは、最終的に平和統一を目途としておられるが、それが達成されるまで、しばらくの間は南北同時国連加盟を目指すということだと理解してよろしきや。(全大統領はこれに対し、それで結構であると答えた。)

(4) 東南アジアの開発途上国が日本に対してもつているアレルギー解消のため大統領が協力して下さるとの御発言があつたことを大変有難く思う。大統領の太平洋頂上会談の構想・提案に敬意を表す。自分も同様な考えをもつている。太平洋が新時代の中心となり、新しい秩序が出来るということは歴史の必然であるが、ただASEAN諸国においては自分たちの勢力がそがれ、薄れるのではないかと懸念していると御説明はよく承つた。大統領は先般スハルト・インドネシア大統領来韓の際この問題につき長時間話し合われたと聞いている。たしかに日、米のような大国がかかる提案を行うことは具合が悪く、これ以外の国々がやる方がよいとの大統領の御意見には同感である。インドネシアその他の国々を如何にしてその提案に同調させるかが問題である。まだ決つたわけではないが、自分がASEAN諸国を訪問する機会があれば、これについても話をするかと致したい。もしこの提案が実現することとなれば、大統領の大変なヒットになるものと考え。

(5) 中小企業の技術協力問題については、政府と民間の双方でやらねばならぬことである。実際の訓練にたずさわるのは民間の工場ということになろうが、自分より帰国の上、民間の団体に対してもできるだけ協力して行こうと話してみることに致したい。なお日本政府指導の下に設けられた中小企業大学に1年コースと2年コースとがあつて、研修生の訓練を行つているが、韓国側でこれを利用されることも一案ではないかと考える。

4. (全大統領) ASEAN5カ国の問題に対する総理の御指摘はまことに正確、適切であり、ASEAN諸国の大部分は韓国側の提案に好意的、肯定的な反応を示しているものと承知しているが、総理の御参考までにインドネシアの態度につき申し加えたい。インドネシアはASEANの主導権をもつていると自負しているところ、その立場からして、彼らの集りが弱化するのではないかと懸念している次第である。しかしながら、ASEANは長期的、地域的、恒久的な機構であるのに対し、太平洋沿岸諸国の頂上会談は折にふれて開催されるのもであつて、性格が異なるものであるので、ASEANの懸念は当たらないと考えている。

5. (中曽根総理) 大統領のいわれることはREASONABLEである。

Ⅲ 第2回首脳会談（拡大会談）

日 時：12日 11時30分～12時

出席者：（日本側）中曽根総理、安倍外務大臣

竹下大蔵大臣、前田大使

中島外審、木内局長

柳局長 他

（韓国側）全斗煥大統領

金副総理兼経企院長官、

李外務部長官、姜財務部長官、

金商工部長官、崔駐日大使、

咸大統領秘書室長、他

1. （全大統領）

今回中曽根総理の御英断によつて御一行の訪韓が実現したところ、昨日来親しく意見の交換を行うことができ、双方の理解が深まったことに、更に懸案の経協問題が妥結に至り、この成果に大変満足している。日韓国交正常化後18年になるが、日本国総理の正式御来韓は韓国独立以来初めての歴史的な出来事であり、両国間の真正なる友誼がこれにより一段と増進、深化されたことを喜んでいる。韓国の言い伝えに「貴賓が来ると雪が降る」ということがあるが、昨夜来の降雪はいわば天与の祝福とも考えられ、両国関係の将来にとつての「瑞雪」と思う。

2. （中曽根総理）

- (1) 昨日来大統領以下韓国側より破格の歓待、厚遇を受けたことに改めて謝意を表する次第であり、永久に忘れ得ざる感銘であつた。韓国側の好意は帰国後日本国民全部に広く伝達致したい。
- (2) ただ今まで大統領との間にテータテートで諸般の問題につき種々話し合うのに時間がかかり、各位をお待たせして済まなく思うが、誠に実り多い会談であつて、大統領の御高見をよく承り、また、私の考えをも申上げ、ここに双方が深く提携して行く基礎が出来たものとする。まず国際情勢、特に中ソ関係の問題、また、朝鮮半島平和統一の問題や太平洋頂上会談の問題についても仔細に話し合つたが、さらに自由貿易の原則を今後とも断じて守つて行かねばならぬということにつき完全に意見が一致した。

また、双方が自由世界の一員としてその団結、結束に寄与して行くことについても意見の一致をみた。さらに大統領より、アジアその他の国々、地域に対する日本の立場を、日本のためにそれぞれ各国へ説明してやろう。特に発展途上国の間には日本に対するアレルギーが存するので、これと同じレベルにある韓国側から日本のために説明してやろうとの暖い発言もあつた。

3. （安倍大臣）

今回総理に随行して来韓したが、大統領以下各位から歓待を受けたことに謝意を表す。2年振りに大統領にお目にかかつたわけであるが、大統領がより健康なうちに、韓国の安全と発展のために努力し

おられる姿に接し、感銘した。既に李外務部長官とも会談して両国間の諸懸案問題につき話し合い、完全な意見一致を見た次第であるが、これにより両国関係の将来のための礎が出来たものとする。今回の総理訪韓を契機として、新しい時代がスタートするものと確信している。大統領以下韓国側の御配慮に重ねて感謝する。

4. (竹下大蔵大臣)

(今回の来韓に際し、大統領より破格の厚遇を受けたことにつき感謝する旨述べられた後)、金副総理、姜財務部長官と経済、財政問題につき忌憚のない話し合いを行うことが出来たことを喜んでいる。世界経済情勢はなお誠に難しいものがあるが、日韓両国国民の英知と勤勉とをもつてすれば必ずやこの困難を克服できると確信する次第である。

5. (中曽根総理)

安倍、竹下両大臣はそれぞれ山口、島根という韓国に最も近い県の御出身であるが、それにつけても両国民はこれまで以上にさらに交流を重ねることが大切だと痛感した。今回訪韓の機会を得、厚遇を受けたことは自分の生涯の光栄として忘れ得ざるものとなろう。

6. (全大統領)

後いくばくも残されていない御一行の韓国御滞在が愉快的な時間であることを願っている。今回総理よりの御提案のうち、双方の間に直通電話を設けて共通の関心事につき直接話し合おうという点があつたが、誠に立派な提案であり、今回の御来韓により、正しい意味について心と心とが通い合う関係がここに発展、深化した点同慶に耐えぬところであり、韓国国民とともにこれを喜んでいる。

7. (中曽根総理)

韓国側の配慮に感謝。韓国国民の暖い心は持ち帰つて日本国民に広くお伝えしたい。大統領が先刻いわれたとおり「永遠の友情」を今後とも堅持して進んで参りたい。

〈付記〉本稿は、2012-2013年度中央大学特定課題研究費による成果の一部である。

(総合政策学部教授・外交史)